

古文

古文 日々の思い [随筆]

徒然草 つれづれぐさ 兼好法師 けんかうほふし

雪のおもしろう降りたりし朝 あした



講師 山本章博

学習のねらい

『徒然草』第三十一段「雪のおもしろう降りたりし朝」を読みます。兼好法師がある人と交わした手紙の話ですが、その手紙の返事が、印象的で忘れ難いものとして記されています。兼好はどのような点を忘れ難いと思ったのか、考えていきましょう。また、助動詞の意味を判別する際の基本的な方法を学びます。

- 学習のポイント
- 〈一〉 手紙の内容を理解する
- 〈二〉 手紙を読んだ作者の思いを考える
- 〈三〉 助動詞の意味を理解する

■手紙の内容を理解する

兼好法師は、ある人に手紙を送りましたが、その朝の趣深い雪のことについて、一切触れませんでした。ある人は、今朝の雪について一言も触れないような人の言うことは聞くことができないと、返事をします。

【重要語法】

・おもしろく→おもしろう→ウ音便

【重要語句】

- ・おもしろし……趣深い。
- ・文……手紙。
- ・やる……送る。
- ・のたまはす……おっしゃる。
- ・ひがひがし……素直でない。ひねくれている。
- ・口惜し……残念だ。

■手紙を読んだ作者の思いを考える

雪のことに触れなかったことに対して痛烈に批判された兼好ですが、そのある人の返事に対して、素晴らしい返事だと感心します。批判されたのにどうして感心したのでしょうか。それは、その人の常に風流を大事にする言葉に感動をしたからです。

【重要語句】

- ・をかし………おもしろい。趣がある。すばらしい。

■助動詞の意味を理解する

●助動詞は、動詞のほかにも、形容詞・助動詞にも接続します。助動詞の意味を考える際には、活用(どのように形が変化するか)と接続(どのような語に接続するか)の知識が必要になります。

●過去の助動詞「き」は、活用して「し」(連体形)、「しか」(已然形)と形を変えます。

過去の助動詞「き(終止形)」
←(活用)

〈動詞〉

(助動詞・存続)

・降り + たり + し (連体形) 「訳」降っていた

(助動詞・打消)

・言は + ざり + し (連体形) 「訳」言わなかった

(助動詞・存続)

・言ひ + たり + し (連体形) 「訳」言っていた

〈形容詞〉

・をかしかり + しか (已然形) 「訳」おもしろかった

●助動詞「たり」は、どのような語に接続するかによって意味が異なります。

・活用する語の連用形 + たり (助動詞・存続) ーている

・体言(名詞) + たり (助動詞・断定) ーである

古文

徒然草

兼好法師

雪のおもしろう降りたりし朝

講師
山本章博

雪のおもしろう降りたりし朝、人のがり言ふべきことありて、文をやるとて、雪のことは何とも言はずりし返り事に、「この雪いかを見ると、一筆のたまはせぬほどの、ひがひがしからん人の仰せらるること、聞き入るべきかは。かへすがへす口惜しき御心なり。」と言ひたりしこそ、をかしかりしか。今は亡き人なれば、かばかりのことも忘れ難し。

【第三十一段】

【現代語訳】

雪が趣深く降っていた朝、(ある)人のもとへ言うべきことがあって、手紙を送ろうとして、雪のことは何とも言わなかった(その)返事に、「この雪をどのように見えていますかと、一言もおっしゃらないほどの、ひねくれた人がおっしゃられることを、聞き入れることができましょうか。(いや、できません。)返す返すも本当に残念なお心です。」と言っていたのは、心がひかれすばらしかった。今は世くなってしまった人なので、この程度のちょっとしたことでも忘れ難いものだ。

